

2023年12月17日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 103 : 1~2

テサロニケの信徒への手紙一 5 : 16~18

「祈り」

(ハイデルベルク信仰問答 祈りについて 問 116)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】 マルコによる福音書 1 : 15

【讚美歌】 2 5 「父、子、聖霊に」

【詩編交読】 詩編 130 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 2 2 9 「いま来たりませ」

【祈祷】

【聖書】 詩編 103 : 1~2、テサロニケの信徒への手紙一 5 : 16~18

【説教】 「祈り」

<祈りについて>

今日から、『ハイデルベルク信仰問答』は、「祈りについて」の項目に入っていきます。

『ハイデルベルク信仰問答』の全体は、三部構造になっていて、第一部は「人間の悲惨さについて」。第二部は「人間の救いについて」。そして第三部は「感謝について」が語られていました。その、第三部の、「感謝について」の、一番最後に、わたしたちは「祈りについて」、教えられるのです。

祈りについて、教えられていく。そうすると、普通わたしたちは、祈りとは何か、ということを知りたいのではないのでしょうか。祈りとは何か。

…世の多くの人たちにとって、「祈る」ということは、「願う」ことだと思われているかも知れません。苦しみ、悩みの時に、そのことが解決するように祈る。自分が、こうなって欲しい、という願いがある時に、そのことが実現するように祈る。その目標が、達成できるように祈る。

「最後の神頼み」なんていう言葉もありますが、「祈り」とは、自分の力を超えた何かの力によって、自分の力が及ばないことを助けてもらう。叶えてもらう。そういうことを願うもののように、思われているのではないのでしょうか。

でも、『ハイデルベルク信仰問答』は、祈りのついでに、このように始めます。

問 116 なぜキリスト者には祈りが必要なのですか。

答 なぜなら、祈りは、神がわたしたちにお求めになる感謝の、最も重要な部分だからです。

なぜ、キリスト者には祈りが必要か。

これは、キリスト者、つまり、罪の悲惨から、イエスさまによって救われた者たちにとっては、祈りが必要である、ということが大前提になっている問いです。

キリスト者には、祈りが必要である。それは、なぜか。そう問うているのです。

そして、その問いへの答えは、こうです。「祈りは、神がわたしたちにお求めになる感謝の、最も重要な部分だから」。

祈りは、感謝だから。だから、キリスト者には、祈りが必要である。

信仰問答は、そのように語るのです。

### <感謝>

教会の歴史において、キリスト者の祈りについては、さまざまな角度から、さまざまな表現がなされてきました。それほどに、祈りとは、豊かなものなのです。

その中でも、『ハイデルベルク信仰問答』は、この「祈り」を、特に「感謝の最も重要な部分」として位置付けています。

感謝。それは、神さまに対する感謝です。

感謝とは、一人ぼっちでいる時に、勝手に、起こってくるものではありません。

感謝とは、自分のために、誰かが、何か良いことをしてくれた。そのことに対する「応答」として現れるものです。相手の言葉や、行動に対して、それを受け取った側の、嬉しい気持ち、ありがたい気持ち。それが、「感謝」です。

ですから、感謝をするということは、まず、わたしのために何かをしてくれた相手がいる、ということです。そして、その相手が誰で、何をしてくれたかを、知っていなければなりません。相手が誰か分からずに、何をしてくれたかも知らずに、感謝することは出来ません。

でも、キリスト者とされたわたしたちは、感謝すべき相手を知らされています。

それは、わたしたちを、罪の悲惨から救って下さったお方。一方的な恵みによって、神の御子イエスさまをわたしたちに与えて下さったお方。わたしたちへの愛を示し、わたしたちの救いのために、御子イエスさまの命をも惜しまれなかった、天の父なる神さまです。

わたしたちには、このように、わたしたちを愛して下さり、救って下さった、神さまに対して、感謝し、賛美し、祈るのです。感謝の応答をすべき相手がいるから、わたしたちは祈るのです。

ですから、わたしたちの祈りは、「応答」である、と言えます。つまり、わたしたちの祈りは、神さまの方からの働きかけによって、はじめて起こる、ということなのです。

まず、神さまの方から、わたしたちのために、アクションを起こして下さいました。

まず、神さまの方から、わたしたちを愛し、わたしたちに語りかけ、わたしたちを罪から救い出し、わたしたちをご自分の恵みの内に生かして下さいました。

そして、神さまは、わたしたちが、その神さまの呼びかけに応答することを、待っておられた。与えられた恵みに、わたしたちが喜んで応じることを、待っておられたのです。

神さまは、わたしたちが、必死で、大声で、何度も呼ばなければ、こちらを向いて下さらない方なのではありません。むしろ、正反対です。

神さまの方が、ずっと、わたしの名を呼んでおられた。ずっと、救いへと招いておられた。ずっと、わたしを見つめ、こちらに来なさいと、声をかけ続けて下さっていたのです。

ですから、「祈り」とは、そのように、いつもわたしの名を呼んで下さっている神さまに、「はい、わたしはここにおります」とお応えすることです。そして、神さまが、いつも絶え間なく注いで下さっている愛と恵みを、喜んで受け取り、「ありがとうございます」と、感謝をもって、ちゃんと応答することなのです。

#### <対話>

このように、「祈り」は、神さまとわたしたちとの、関係においてなされるものです。ですから、よく「祈りは神さまとの対話」である、とも言われます。

わたしたちは、祈ることを通して、神さまと対話するのです。そうして、わたしたちは、神さまと、ますます親しい、深い関係を築いていくことが出来ます。

祈りによってこそ、わたしたちは、神さまと共に生きていくのです。

祈りとは、信仰生活そのもの、と言ってもよいでしょう。祈ることなしに、信仰生活をしているとは言えません。

なぜなら、祈らないとは、呼びかけて下さる神さまの御声を聞かないこと、無視していることです。祈ることなしに、神さまの恵みを知ること、受け取ることが出来ないからです。

わたしたちは、恵みを受けたから、祈ることが出来るし、また、祈ることによって、さらに恵みを、受け取ることが出来るからです。

ですから、まだ神さまのこと、救いのこと、恵みのことが、よく分からない、という方であっても。もし、天の父なる神さまに向かって、祈ってみたいと思ったなら。祈り始めたなら。それは、そこに、確かに神さまの招きがあった、ということであり、その恵みを受け取り始めている。神さまと共に生き始めている、ということなのです。

このように、祈りは、キリスト者にとって、信仰者にとって、必要不可欠なものです。神さまとの対話なしに、神さまと共に生きる、ということはありません。

わたしたちは、人間同士でも、相手とよりよい関係を結びたいと願うなら、まず対話をしなければなりません。相手の話に耳を傾け、また自分の胸の内を話します。そのことで、相手のことを、ますます深く知っていくことが出来るのです。

わたしたちは、神さまとも、祈りを通して、そのように関係を築いていくのです。

祈れば祈るほど、わたしたちは神さまの御心を、知らされていきます。神さまの恵みを、見つめるようになります。神さまの御言葉を、ますます聞くようになります。

そして、わたしたちは、祈りを通して、自分の心の内を。不安も、恐れも、願いも、全てを神さまに打ち明けていきます。神さまは、すべてに耳を傾けて、必ず聞いて下さいます。

でも、神さまが、わたしたちの心の内を聞いて下さる、ということと。わたしたちの願い求めることが叶えられる、ということとは、全く違うことです。

なぜなら、神さまは、わたし以上に、わたしのことを、よくご存知だからです。わたしが自分でも知らない心の奥底まで、神さまは知っておられるからです。

ですから、わたしが必要と思うよりも、もっと必要なものを、神さまはご存知です。わたしが良いと思うよりも、もっと良いものを、神さまは用意して下さいます。

確かに、わたしたちは、祈りを通して、あらゆることを打ち明け、願い求めても良いのです。しかし、最後には、神さまが、わたしに最も良いものを与えてくださることを信じて、そのことが成し遂げられますように、と祈るのです。

そのような祈りの中で、わたしたちは、自分では分からなかったことを、神さまから知らされていきます。祈ることによって、隠されていた自分の罪深さに、気付かされることがあります。祈ることによって、見えていなかった恵みを、発見することがあります。

また、祈ることで、自分では願いもしなかったものが、与えられることもありますし、神さまがわたしに望んでおられることを、示されたりもします。

そうして、わたしたちは、神さまとの対話を通して、神さまのことを知っていくと同時に、本当の自分自身についても、より深く知らされていくのです。

そうして、わたしたちの信仰の歩みは、ますます神さまにより頼み、ますます神さまにお委ねし、ますます神さまを慕い求めていくものへと、導かれていくのです。

#### <イエスさまにおいて、絶えず祈る>

ですから、わたしたちには、祈りが必要です。だからこそ、神さまは「祈ること」を、わたしたちにお命じになります。テサロニケの信徒への手紙一 5：16～18 にはこうありました。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

これは、美しい御言葉です。しかし、とても難しい御言葉です。

わたしたちは、いつも喜んでいること、絶えず祈ること、どんなことにも感謝することが、本当に、出来るでしょうか。このようなご命令に、従うことが出来るでしょうか。

不安に襲われる時。心が深く傷ついた時。肉体を苦痛が苛む時。深い悲しみや嘆きを覚える時。それでも、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」そう言われたら、わたしたちは戸惑ってしまうのではないのでしょうか。

しかし、大切なことは、この御言葉の後に、「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」とあることです。これらのことは、キリスト・イエスにおいて、わたしたちに可能となる、ということなのです。

そもそも、祈りとは、感謝の応答なのでした。そして、わたしたちが、誰に、感謝すべきか。わたしたちのために、誰が、何をしてくれたか。それをすべて教えて下さったのは、神の御子、イエスさまだったのです。

天の父なる神さまが、わたしたちをどこまでも愛し、罪から救い出し、共に生きることを心から望んで下さっている。そして、いつでも、どこでも、共にいて下さる。そのことを、神の御子イエスさまは、わたしたちに教え、また、ご自分の十字架と復活の御業を通して、その救いを、実現して下さいました。

このイエスさまが、共にいて下さるから、わたしたちは「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する」ことが出来るのです。

わたしが呻いている時も、イエスさまが共に呻いて下さる。わたしが罪に押し潰されそうな時も、イエスさまが、その重荷を引き受けて下さる。わたしが絶望を覚える時も、イエスさまが、その絶望の中にさえ、共に立っていて下さり、共に叫び、共に神さまを呼び、共に祈って下さるのです。わたしたちには、どのような苦しみの時も、どのような哀しみの時も、どのような嘆きの時も、このイエスさまが共にいて下さるのです。

そしてイエスさまは、苦しみを歩み抜き、罪を滅ぼし、死にも打ち勝ち、復活なさった、その勝利の御手で。いつでも、どこにあっても、わたしを捕らえ、永遠の命へ至る道、天へと至る道、父なる神さまの御許に帰る道へと、導いて下さいます。

だからこそ、わたしたちは、人生の、どのような時にあっても、イエスさまにおいて、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝することが出来るのです。イエスさまが共にいて下さること、そのものが、喜びであり、感謝なのです。

だからわたしたちは、イエスさまにおいて、父なる神さまに祈ることができます。イエスさまの救いの出来事の中で、その恵みに包まれて、わたしたちは、祈るのです。

祈ることは、そのイエスさまの恵みの中に立つことに、他なりません。だから、「絶えず祈りなさい」と言われます。祈りなさい。恵みの中に立ちなさい。あなたには、いつもイエスさまがおられるから、いつでも祈ることができるのだ。そう言われているのです。

#### <恵みと聖霊>

さて、最後に、『ハイデルベルク信仰問答』の間 116 の答えでは、キリスト者にとって、祈りは感謝の重要な部分であり、必要なものだ、と答えた後、続けてこう語られていました。

「また、神がご自分の恵みと聖霊とを与您ようとなさるのは、心からの呻きをもって、絶えずそれらをこの方に請い求め、それらに対して、この方に感謝する人々に対してだけ、だからです。」

聖霊は、わたしたちに信仰を与え、天におられるイエスさまと結び付け、救いの恵みに与らせ、信仰生活を導いて下さるお方です。

ここでは、神さまは、恵みと聖霊とを、絶えず心から求め、また、それを感謝する者にだけ、与えようとされる、と語られています。

でも実は、祈っている、ということは、もう既に、神さまの恵みと聖霊をいただいている、ということです。だから、わたしたちは、そのことに感謝をささげます。

でも、それで終わりではなくて。わたしたちは、なお絶えず、生涯を通して、恵みと聖霊を、心から求めていかなければならないのです。

『ハイデルベルク信仰問答』で、前回までは、「十戒について」学んできました。「十戒」は、わたしたちが、救いの恵みの応答として、神さまに喜ばれる感謝の生活をするための、「道しるべ」として与えられていたのです。

でも、わたしたちは「十戒」で、神さまが求めておられることを知れば知るほど、罪を赦されたのに、なお、神さまに背いてしまう自分。感謝をささげる生活においても、なお、御心に従えない自分の罪深さを、知らされていくのでした。

…わたしたちは、イエスさまの救いをいただいて、すぐに、神さまの御心の従うことのできる、正しい、完璧な人間になれるのではないのです。罪人でありながら、何も出来ないままでありながら、しかし、神さまの恵みによって、赦していただいた者だからです。

だからこそ、わたしたちは、感謝を全生活で現わしていくことも、祈りによって、助けを求めていかなければなりません。

少しでも、神さまに喜ばれるように。少しでも、神さまの御心に添えるように。そのためにも、わたしたちは、神さまの恵みと、聖霊のお働きを、絶えず祈り求めるのです。

そして、「求めなさい。そうすれば、与えられる」と聖書の御言葉は語ります。

神さまは、わたしたちの感謝の心を、祈りを、喜んで受け入れて下さいます。そして、わたしたちに、喜んで、聖霊を豊かに与えて下さるでしょう。

そうして、わたしたちは、ますます感謝の祈りをささげていく者となるのです。

#### <宝物>

祈ること。それは、大きな恵みです。わたしたちが祈る時、そこでは、父なる神さまが耳を傾けて下さり、イエスさまが共にいて下さり、聖霊なる神さまが働いていて下さっています。祈る時、わたしたちは、三位一体の神さまの御前に立ち、神さまと向かい合い、神さまとの交わりに与っているのです。

ですから、祈ることは、キリスト者にとって必要なことです。祈ることは、感謝の生活、信仰生活の土台です。生きるために、呼吸をするのと同じくらい、信仰に生きるためには、祈ることが必要です。

「祈り」は、わたしたちに与えられた、大きな恵み、賜物であると同時に。わたしたちが、感謝をもって、心がけて、怠らなくなすべきことでもあるのです。

むしろ、祈らないことは、自分の呼吸を止めること。神さまから遠ざかり、自分を苦しみへと追いやっていくことになります。

ですから、祈れない、と思う時も、わたしたちは、祈るべきです。祈ることそのものを通して、わたしたちは、神さまとの交わりへと、立ち戻らされていくからです。

カルヴァンが、キリスト者が祈ることについて、面白い表現をしています。

「主から期待すべく我々の前に置かれたものの内で、祈りによって求めよと命じられていないものはないのだから、主の福音が我々の信仰に示して直視させる宝を祈りによって掘り出すということは真実である」

「宝にいたる道を祈りによって切り開かなければならない」

カルヴァンは、祈りは、埋められている宝を掘り出すことだ、と言っています。

祈ることによって、わたしたちは、神さまの恵みを見出すことが出来る。神さまの愛を受け取ることが出来る。神さまの御心を知り、神さまがなさってくださる御業を、目撃することが出来るのです。

祈らなければ、それは通り過ぎていきます。神さまの恵みに気付けません。神さまの言葉が聞こえません。神さまの御業を見逃します。

もったいないことです。申し訳ないことです。わたしたちは、喜んで、もっと信仰の宝物を掘り起こしていきたいのです。溢れるほどの恵みを、もっと、求めていきたいのです。祈りを通して、神さまの愛を、恵みを、御業を、一つも取りこぼさず、感謝をもって、受け取ってきたいのです。

何より、神さまが、そのことを望んでおられます。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

こうしてわたしたちは、ますます聖霊に満たされ、イエスさまを近く覚え、父なる神さまを喜んで礼拝する者とされていくからです。

#### 【お祈り】 天の父なる神さま

あなたが、いつも愛の眼差しをもって、わたしたちを見つめ、名前を呼んで下さること。イエスさまを通して、すべての恵みを与え、いつも共にいてくださること。また、聖霊によって、信仰を力強く導いて下さいますことを、心から感謝いたします。

どうか、わたしたちが、あなたの御言葉に耳を傾け、呼びかけにお応えし、恵みを感謝して受け取り、熱心に祈る者となる事が出来ますように。

そして、ますます大胆に、あなたに近づき、ますますあなたの恵みを知り、ますますあなたを愛する者とならせて下さいますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 4 7 5 「あめなるよろこび」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 6 5 - 1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 2 6 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン